

図書紹介

張 貞京 著

『高齢期を生きる障害のある人』

——人とつむぎ、織りなす日々のなかで』
(全障研出版部 2023年)

黒川 真友



定価 1,980円

『高齢期を生きる障害のある人』目次

はじめに
第1章 高齢期の発達に光を当てる
第2章 一人ひとりの人生からみつめる高齢期
第3章 歳を重ねて花開くしごと
第4章 老いと死に向き合う
第5章 その人らしく生きる高齢期と看取り
第6章 他者と支え合って生きる
補章 めざしたい実践
おわりに

本書は、滋賀県湖南市にある入所施設もみじ・あざみでの高齢期を迎えた知的障害のある人たちの姿と生活が綴られている。

高齢になることは、心身が衰えていく、社会的な活動が制約される、介護が必要になる等、生活上の困難や不安が大きくなっていくイメージで語られることが多い。日本全体の高齢化とともに障害のある人の高齢化も進んでおり、支援者からすると、これまで見てきた姿からの変化や介助度の高まり等で、戸惑うことが多くなっている。また、高齢期を迎えた障害者の暮らしを支える制度的基盤は脆弱であり、グループホームでは設備面や人的な面からも十分に生活を支えきれない実態がある。

高齢期は喪失すること、課題が多いという現実を前にして、ネガティブなイメージになりがちだが、それだけで語られていいものだろうか。本書では「高齢者の機能低下ばかりに注目し、介護をうけるばかりの存在としてではなく、高齢者一人ひとりの人格を認め、喪失も含めた様々な変化を

通して高齢期が発達的な意味を持つ可能性があることを明らかにしよう」(p.22)とする世界的な動きがあることを念頭に、もみじ・あざみで生活する高齢期を生きる障害のある人が、「衰えと喪失が増えていても、今なお願いをもって悩みながら、発達主体として」(p.24)生きる姿を描いている。

●老いを受け止める

目次からもうかがわれる通り、著者がもみじ・あざみで出会ってきた高齢期を迎えた障害のある人たちの一人ひとりの人生、しごとへの思い、死と向き合うこと等、多様な姿が紹介されている。

本書で紹介される一人であるなつこさんは、80歳を迎え、怪我もあって、これまでできていたことができず、思い通りにならない生活に悩んでいる。なつこさんは、もみじ・あざみで過ごすなかで、信頼できる友だちができ、人とのつながりから得られる喜びを感じてきたという。高齢になってできないことが増えても、友だちに自分の役割を託したり、これまで世話をしていた仲間が自分を手伝ってくれる姿を見て、大人になったと感じたりするようになっていく。なつこさんは、役割を人に託しつつ、自身は誇りをもって取り組んできたむすび織を今後もがんばっていくという、老いをしっかり受け止めた生き方を示していく。

著者は、高齢期を「衰えや喪失といった変化を受け止める過程で悩みながら自分を見つめ直し、それまでとは異なる付き合い方を探り学んでいく時期である」(p.114)と捉える。できていたことができなくなる、という喪失感、不安と焦りを

生み出すだろう。なつこさんは、信頼する仲間や誇りに感じてきたむすび織というしごとが支えとなって、老いを受け止めていくことができたのではないだろうか。これまでの人生で積み上げてきた人への信頼やしごとの経験が、高齢期を生きる糧になっていくのだろう。

●人生の物語を知る

著者はまた、「高齢になった人や、老いと死に悩む人とかわる時、その人が歩んでこられた人生の物語を知ってほしいと思います。『介護が必要な高齢者』としてではなく、自分にとってやりがいのあるしごとを求め働き、暮らしのなかで他者と支え合う日々を送ってきた存在として尊重する眼差しをもってかわること」(p.120)が大切だと言う。

筆者の勤める施設では、急な体調の変化によって、介助度が高くなり、今後の生活をどう支えていくか悩むAさんの事例があった。支援者は状態の変化をどう受け止めていいのかわからず、目の前の対応に追われ、混乱した日々を過ごした。職員は知的障害のある人の対応には慣れているものの、身体的介助が必要になった場合の経験が浅かった。また、行動面での配慮が必要な人と高齢のAさんの共同生活であったので、Aさんの安全を守りながら生活していけるのかという不安があった。Aさんの今後の生活を考えていくうえでも、Aさんの人生を振り返り、どんな生活をしてほしいのかを話し合ってきた。Aさんは、親からの愛情をたくさん受けて育ってきたことや、意志が強く、時に親や支援者に反発しつつも好きな人たちの間で豊かな表情を見せてきたことを知ることができた。Aさんは入院中ほとんど反応がなく過ごしていたが、知っている施設の職員が面会に行くと、身体を起こそうとする姿がある等、慣れ親しんだ関係性は、すぐには失われなくても感じるすることができた。施設だけでなく、関係者みんなでAさんのために話し合いを重ねることで、支援者も老いに向き合うことができたように思う¹⁾。

障害のある人の高齢期を迎えた状態の変化に直面したとき、支援者はどうしても目の前の必要な介助や体制づくりに注力してしまう。そんなとき、少し立ち止まって、その人の歩んできた人生や大事にしてきたことを振り返ることで、本人の思いを感じることができるのではないか。その人の人生の物語を知ることによって、それまでの生活と断絶するのではなく、変化があるなかでも本人が大切にしてきたものをどう豊かにしていけるかを考えていけるだろう。

●高齢期を生きる姿

本書では、随所に、もみじ・あざみで長年仲間を見守り、実践を重ねてきた石原繁野さんの言葉が紹介されている。一人ひとりの個人史を語り、その人たちがどんな願いと想いを抱いているのか、どんな変化をしてきたのかに目を向けてきた実践者から学ぶことは多い。障害のある人が高齢期を迎えたときに、どんな視点をもって関わってきたのか、その人の人生を語る実践者の役割と大切さを感じる。

また、もみじ・あざみの実践をみると、衰えと喪失だけではない高齢期のあり方が見えてくる。生活で築いてきた人間関係やあざみ織を始めとするしごとの経験、老いと死に関する学びといったことが、変化の過程を受け止めていく土台になっていくのだろう。変化のある時期に悩み、人生を振り返りながら、新たな自分を見出していく高齢期の生き方を示してくれる。

本書をもとに、高齢期を生きる障害のある人たちの人生や実践について職員や保護者などと語り合うことで、ネガティブなイメージだけでなく、高齢期を豊かに生き、発達をしていく姿が見えてくるのではないだろうか。

注

- 1) 藤井美沙子(2023)Aさんとともに過ごした日々。全障研第57回全国大会第11分科会「障害の重い人の生活と支援」レポートとして報告。